

栗野北遺跡発掘調査報告

2022（令和4）年2月

三重県埋蔵文化財センター

例　言

- 1 本書は、令和2年度に実施した農業用施設アスベスト対策事業城田・下外城田地区に伴う栗野北遺跡の工事立会による埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 工事立会調査地は、三重県伊勢市上地町に所在する。
- 3 工事立会調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。現地調査から報告書作成に至る経費は、三重県教育委員会が文化庁からの国庫補助金を得て一部を負担し、その他を三重県農林水産部から執行委任を受けて実施した。
- 4 工事立会調査の体制は次のとおりである。

工事立会調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課 課長 稔積裕昌 主任 元座範子
工事立会調査期間 令和2年10月1日～10月6日
工事立会調査面積 60m²
- 5 現地での図面作成及び写真撮影は工事立会調査担当者により、遺物写真撮影は当センター 主査 森川常厚による。
- 6 本書の執筆は元座及び森川が行い、編集は森川が行った。
- 7 本書の遺跡地形図で使用した図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得た三重県共有デジタル図を用いている（令和3年4月5日三総合地第1号）。調査区位置図に使用した事業計画図は三重県農林水産部の提供による。
- 8 本書で用いた座標は世界測地系で、方位は第VI座標系による座標北である。標高は、東京湾平均海水面を基準とした。
- 9 土層及び土器の色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、2005年版）に拠った。
- 10 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

I. 前言	(元座範子) ...	1
1. 調査に至る経緯		1
2. 調査の経過		1
3. 調査の概要		1
4. 文化財保護法に関する諸手続き		1
II. 位置と環境	(森川常厚) ...	2
III. 遺構	(　#　) ...	6
1. 層序		6
2. 遺構		6
IV. 遺物	(　#　) ...	8
1. 出土遺物		8
2. 参考遺物		9
V. 結語	(　#　) ...	10

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第5図 調査区土層断面図	7
第2図 遺跡地形図	4	第6図 遺物実測図	8
第3図 調査区位置図	5	第7図 参考遺物実測図	10
第4図 調査区平面図	6		

写真図版

写真図版 1	調査前風景	写真図版 4	S Z 7・S D 8
 調査前風景	 P 1 等検出状況
写真図版 2	調査区西部全景	写真図版 5	層序
 調査区中央部全景	 栗野北遺跡出土遺物
 調査区東部全景	写真図版 6	奥の浦遺跡出土遺物
 S E 4 検出状況		
写真図版 3	S E 4		
 S D 1		

表目次

第1表 遺物観察表	9	第2表 参考遺物観察表	10
-----------------	---	-------------------	----

I. 前 言

1. 調査に至る経緯

本書で報告する調査は、農業用施設アスペスト対策事業城田・下外城田地区に伴って実施した、埋蔵文化財の記録保存にかかるものである。当事業の主体は三重県農林水産部、実施機関は伊勢農林水産事務所農村基盤室である。

当該事業地には栗野北遺跡や奥の浦遺跡等の埋蔵文化財包蔵地が周知されているため、事業の実施に先立ち確認調査を行った。その結果、事業地のうち栗野北遺跡60m²について、遺構・遺物が良好に包蔵されていることが判明した。この取り扱いについて伊勢農林水産事務所と協議を行った結果、アスペスト用水管の更新時に工事立会調査による記録保存を行うことになった。

2. 調査の経過

調査は、令和2年10月1日から10月6日の期間中3日間実施した。以下、その経過を調査日誌から抄録する。

【調査日誌（抄）】

〔令和2（2020）年〕

10月 1日 調査開始。表土掘削。

遺構掘削。写真撮影。

遺構実測図作成。

2日 表土掘削。遺構掘削。写真撮影。

遺構実測図作成。

6日 表土掘削。SD1掘削。写真撮影。

遺構実測図作成。調査終了。

3. 調査の概要

調査は、工事立会として実施し、調査区西側から開始した。

表土及び包含層は重機を用いて掘削を行い、遺構検出・遺構掘削は人力で行った。

遺構実測図は、全体平面図及び土層図を1/20で当センター職員による手測りで作成した。

写真的撮影には、一眼レフデジタルカメラを用いた。遺構写真是、ニコンD3300で撮影し、補助的に

コンパクトデジタルカメラを用いた。遺物写真是、ニコンD800Eを用いた。

なお、夜間の交通安全を確保するため、1日毎に埋戻しを行う必要があった。そのため、全長40mの調査区を3分割し、1分割毎に即日調査を完了することを繰り返す調査手法を採用した。このため、調査区全体を通じた写真撮影は実施できなかった。

4. 文化財保護法に関する諸手続き

今回の調査にかかる埋蔵文化財の文化財保護法等にかかる法的措置は、以下のとおりである。

（1）県文化財保護条例第48条第1項

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」

三重県教育委員会教育長あて三重県知事通知

令和2年7月8日付け、勢農第3193号

（2）県文化財保護法条例第48条第2項

「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」

県知事あて県教育委員会教育長通知

令和2年7月8日付 教委第12-4066号

（3）文化財保護法第100条第2項

「埋蔵文化財の発見・認定通知」

（伊勢警察署長あて三重県教育委員会教育長通知）

令和2年11月2日付 教委第12-4413号

（元座）

II. 位置と環境

栗野北遺跡（1）は伊勢市上地町から栗野町に広がる埋蔵文化財包藏地である。当地は、伊勢平野最大の河川である宮川の下流にちかい中流左岸に相当する。紀伊山地の高峰、大台ヶ原を源に山間部を中心構造線に沿って東へ流れるが、当地付近で行く手を丘陵に遮られ、向きを北方に変え、伊勢平野に流れ出る。この宮川の屈曲部は南東側が丘陵、北西側には沖積平野という対照的な地形を呈している。栗野北遺跡は、その沖積平野の自然堤防上に位置し、標高は7m前後である。東方を流れる宮川までは1km、西方200mには小河川の汁谷川が流れ、それを境に約10mの段差をもって河岸段丘となる。

伊勢市史によれば、中心的な時代としては弥生時代中期と平安・鎌倉時代とし、鉄滓の出土より野耕治が行われていたことを想定している。また、集落にちかい西側では弥生時代の遺物が集中するとしている³。約300m西側には、県内で著名な弥生時代の遺跡である中楽山遺跡（2）があり、弥生時代後期の堅穴住居や方形周溝墓が検出されている³。また、北方1kmに所在する野垣外遺跡（3）でも同様な時期の遺構・遺物が検出され、近隣の奥の浦遺跡（4）、マコモ遺跡（5）でも弥生土器が採集される等、当地域には弥生時代の大集落が、中期から後期、さらに終末期にかけて続いていることが想定される。

既述した段丘上のマコモ遺跡内には8基の古墳で構成するマコモ古墳群（6）があり、明治42年に開墾された1号墳の出土遺物によれば後期から終末期の古墳のようである。栗野北遺跡の所在する段丘下においてもお頭塚古墳（7）、小野古墳（8）が伝えられるが、開発行為により消滅し、古墳かどうかを含め詳細は不明である。律令期に入つても、既述した野垣外遺跡で掘立柱建物等が検出されており、弥生時代以降、人々の活動は続いているようである。

遺跡に南接する栗野集落が基幹と思われる旧栗野村は、光明寺古文書によると11世紀後半から13世紀後半の売券に記載がみえる³。このことから、中世前半にも一定の人口を有していたことが推測される。調査例では、前述した野垣外遺跡の発掘調査で鎌倉

時代まで下る堅穴住居や溝が検出されていることに加え、近隣の各遺跡から中世の遺物が採集されている。南西2.5kmの岩出遺跡群跡（9）では12世紀中葉から14世紀前葉にかけての大集落の一端が検出されており、当地に所在したと伝える神宮祭主の館と関連付けている³。その館の場所が岩出城（10）とされ、神宮祭主大中臣氏の居館とされる。戦国時代には土塁や堀を巡らした城となつたが、1600年には廢城となつたようである³。また当地は、神宮の神官とする荒木田氏や度会氏の勢力下にあり、当遺跡西方の田丸や内城田が荒木田氏の本拠とする説もある³。

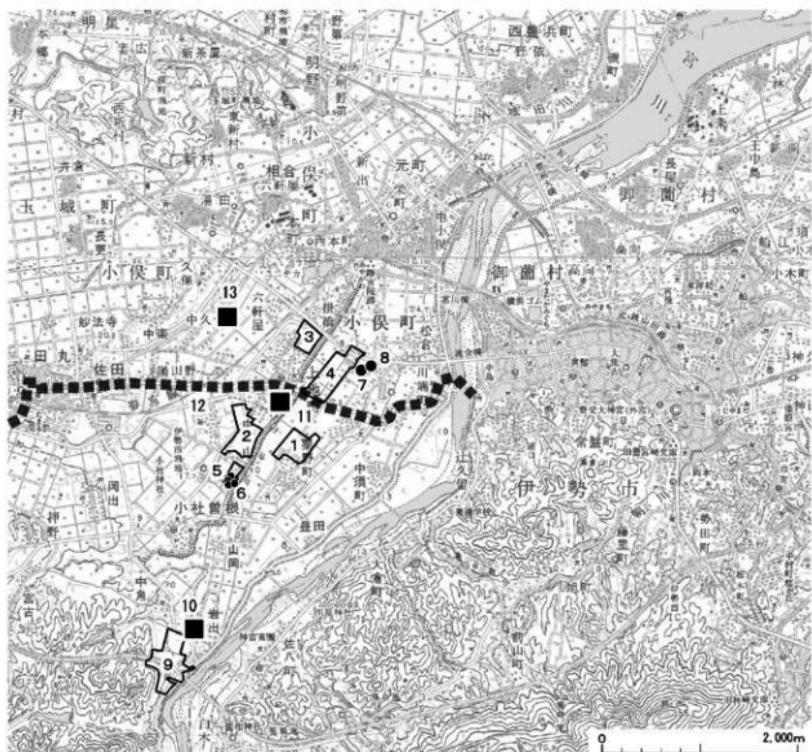
中世後期にはいると、北畠氏による当地への圧力が高まる。『氏經神事記』には1450年に北畠氏が当地を焼き払った記載があり³、1486年には、宇治と山田の対立に北畠氏が関与した山田合戦が勃発する³等、不安定な世相となるようである。栗野北遺跡西方の段丘線には寺山城跡（11）が所在する。段丘線を除く3方に土塁と堀を巡らし、一辺60mの単郭方形の城館を呈する。北側には旧熊野街道（12）があり、街道守備を担う城館と推測されている³。さらに北西の外城田川右岸の段丘上には、中久保屋敷跡（13）と伝承される城館がある。一辺60mの方形を呈する様な土塁があるとされるが、詳細は不明である。ただし、中世城館に関しては、その分布密度は比較的薄い地域といえる。

なお、既述した熊野街道であるが、平安時代後期の熊野信仰の高まりにより神宮参拝後に熊野へ向かう街道となつた。熊野信仰が衰えた後は、西国巡礼がこれに代わり、近世まで多くの道者が通行したようである。信仰の道となる以前から生活の道であった可能性は高く³、栗野北遺跡周辺はこうした交通の要衝にあたるため、弥生時代から中世に至るまで連続と遺跡が連なる状態を呈するものと思われる。

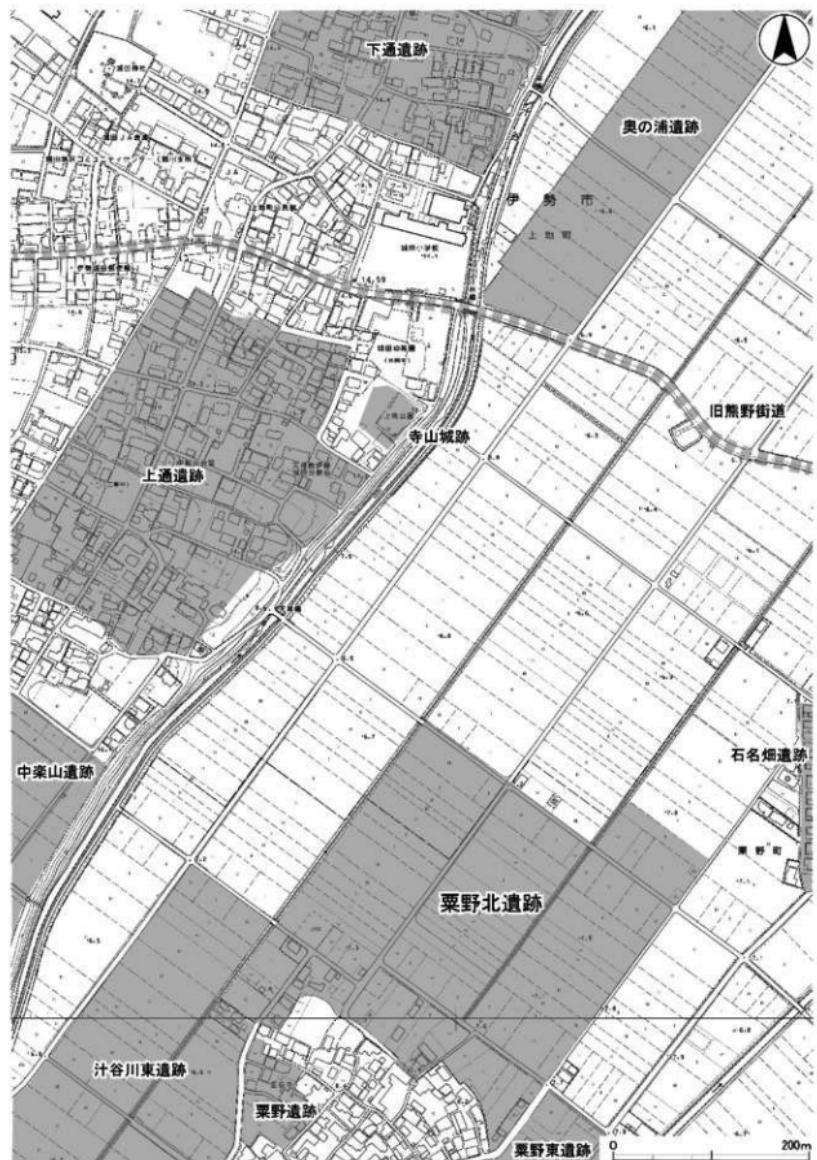
（森川）

〔註〕

- ① 岡田 登「第三章 遺跡概観」『伊勢市史 第六巻 考古編』伊勢市 平成二十三年三月三十一日
 - ② 下村登良男「伊勢市上地町・中楽山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1973. 3
 - ③ 下村登良男「伊勢市上地町野垣外遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 三重県文化財連盟 1979. 12
 - ④ 前掲①に同じ
 - ⑤ 前掲①に同じ
 - ⑥ 下中邦彦編集『三重県の地名』株式会社平凡社
一九八三年五月二〇日
- ⑦ 前川嘉宏『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告－第6分冊一蚊山遺跡左郡地区』三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1993. 3
 - ⑧ 上村芳夫「岩出城」『三重の中世城館』三重県教育委員会 1976
 - ⑨ 「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名大辞典 24 三重県』株式会社角川書店 昭和58年6月8日
 - ⑩ 前掲①に同じ
 - ⑪ 前掲⑨に同じ
 - ⑫ 前掲①に同じ
 - ⑬ 植田清砂「熊野街道の歴史的特性」『歴史の道調査報告書』（熊野街道）三重県教育委員会 昭和五六年三月



第1図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「松阪」「伊勢」1:50,000より]



第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)

III. 遺構

溝・土坑等を検出しているが、調査区が狭小なため、その性格を明らかにできたものは少ない。時期は、一部に古代の遺物を含むが混入の可能性が高く、鎌倉時代のものが大半と考えられる。

1. 層序

現況は圃場整備が施工された農道で、舗装がされている。したがって、自然の微地形は把握しがたい状況である。表面はアスファルトで、その下60cmまでは、圃場整備の際に造成された客土である。その下に暗褐色の極細粒砂が20~30cmの厚さで残存し、これが包含層と考えられる。アスファルト下約1mで黄褐色の極細粒砂があり、これが検出面である。この層をアスファルト下1.4mまで確認したが、変化はなく、厚さ50cm以上の堆積を呈するしっかりした層である。ただし、包含層を含めて砂質が強く、粘性が弱い。

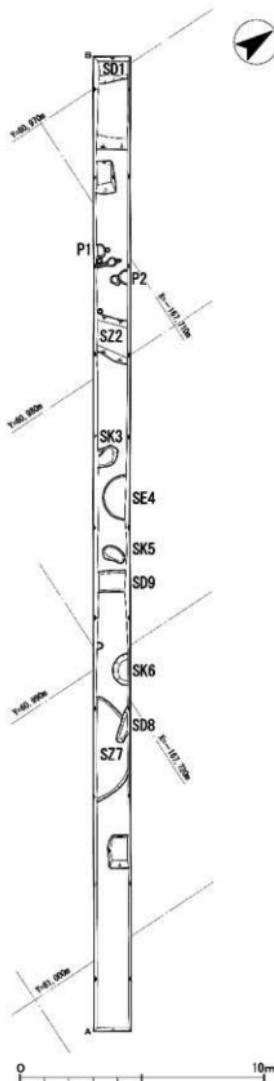
2. 遺構

S D 1 調査区北西端で検出した。対岸は調査区外のため確認できないが、現況から農業用排水路により消滅している可能性が高い。幅1m以上、検出面からの深さ30cmをはかるしっかりしたもので、埋土は暗褐色の細粒砂である。土器類の皿や鍋、山茶碗や青磁碗の多様な遺物が出土しているものの、いずれも小片である。

S Z 2 念のために掘削したが、風倒木痕であることを確認する結果となった。

S K 3 調査区端での検出のため全体の形状は不明であるが、短辺60cm、長辺80cm以上の長円形を呈するものと推測される。埋土はS D 1と同様であるが出土遺物は無く、直接的な時期決定根拠がない。

S E 4 調査区端での検出であるが、直径1.8mの円形を呈するものと考えられる。埋土は前述したものとは異なり、にぶい黄褐色の細粒砂である。深さ50cmまで確認したが、既述したように砂質の土壤のため崩落の危険が高く、調査区も狭小なため掘削を断念した。しかし、その形状から井戸であるもの



第4図 調査区平面図 (1:200)

と推測している。掘削を途中で断念したこともあり、山茶椀や陶器の小片が出土するに止まった。

S K 5 調査区中央部で検出した長辺 1m、短辺 60cm の不整長円形を呈する小型の土坑である。深さも検出面から 20cm 未満の浅いものである。古代の土師器壺の小片が出土しているが、他に中世以降と思われる薄い土師器の小片が複数あり、この壺は混入と考えた。

S K 6 調査区端での検出であるが、直径 1.3m の円形を呈するものと考えられる。深さは検出面から 15cm 程度の浅いもので、埋土は暗褐色と褐色の細流砂が混じった状態で、一様でない。山茶椀や土師器の小片が出土したのみである。

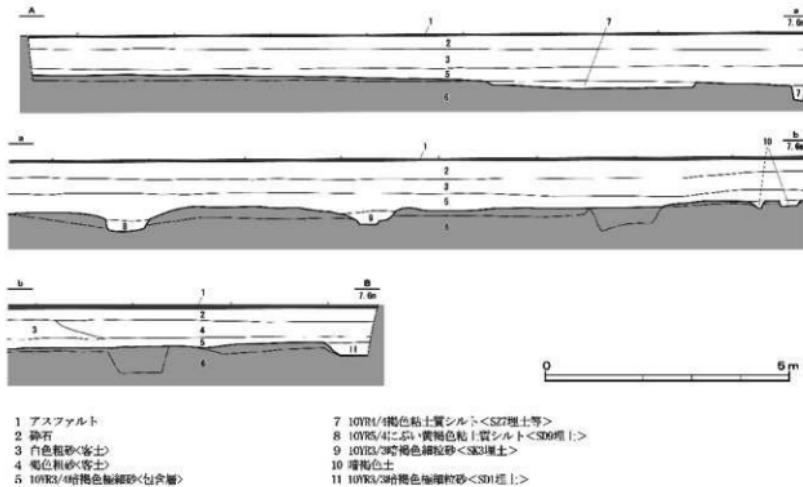
S Z 7 調査区中央部に浅く広がる粘質土である。

粘質土は褐色を呈し、調査区外へ広がるため不明確な部分も多いが、直径 4m の円形の範囲に広がるものと考えられる。厚さは 20cm に及ばない薄いものであるが、均一な厚さを保っている。土師器皿や陶器の小片が出土している。

S D 8 調査区中央部で検出した幅 50cm、検出面からの深さ 30cm の幅に比べ深いしっかりした溝である。北東側は調査区外へ続き、南東側は調査区内で途切れている。埋土はぶい黄褐色の極細粒砂で、須恵器や山茶椀が出土している。

S D 9 調査区中央部で検出した幅 90cm の溝である。深さは検出面から 10cm 程度で、幅に比べ浅いものである。このためか出土遺物は無く、時期決定の直接的な根拠はない。

(森川)



第5図 調査区土層断面図 (1:100)

IV. 遺 物

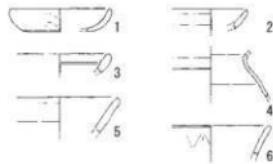
1. 出土遺物

遺物は少量が出土したに過ぎない。しかも大半が小片で、全体の形状が明確なものは無い。

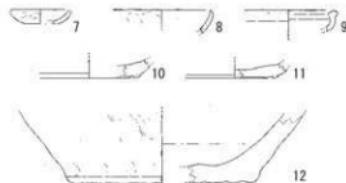
こうした中で最も残存が良好なものが、SD 8 出土の土師器鍋（20）である。口縁部形態は2段階c型式に分類され、体部には細かいハケメ調整、器壁は薄くなるものの極限までの薄さはない。14世紀初頭の鎌倉時代末期の年代が与えられる。¹⁰ 中世の土師

器皿は器形の歪みが大きいものが多く、小片での判断は困難であるが、SD 1 の 1・2、SE 4 の 8、SZ 7 の 14・15 は器壁に厚さを残しており、口縁部の内湾状態から A₂～A₄ に分類され、13世紀後半の時期が与えられる。山茶碗では、SE 4 の 10・11 は高台が形骸化したもので、SD 1 の 5 や SK 6 の 18 は口縁部が直線的である。これらはⅢ段階 7 型式以降で13世紀中頃を過らないものとなる。この様に出土遺物の中心は、13世紀後半から14世紀初頭の鎌倉

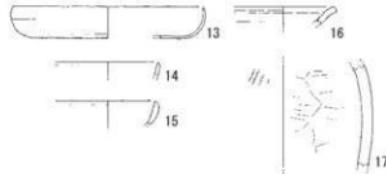
SD 1



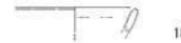
SE 4



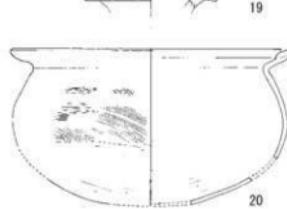
S 2 7



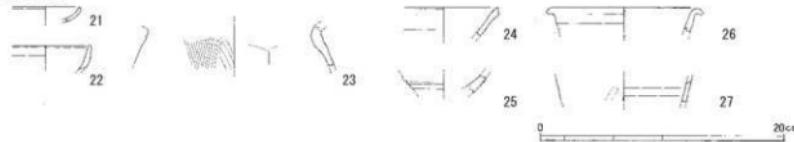
SK 6



SD 8



包含層他



第6図 遺物実測図 (1 : 4)

時代後半のものである。

一方、SD 1 の土師器鍋 4 や S Z 7 の土師器皿 13 は器壁が薄く、時期が下る様相を呈する。13 の口径は 15.7 cm を測る。器形の特徴と比べれば、口径が過大なものとなるが、前述した器形の歪みのために最大径を表示した可能性がある。形式的には A₅ に分類され 14 世紀後半の室町時代に下るものと考えられる。また、SD 1 の土師器鍋 3 や S Z 7 の山皿 16 は時期が遅る形状を呈する。土師器鍋は 1 段階、山皿は II 段階に分類され、12 世紀前半から中頃となり平安時代末期に遡る。この様に、少數ながらも平安時代末期や室町時代のものもあり、鎌倉時代後半から末期を中心に概ね中世全般に及ぶ遺物が出土している。

なお、若干ではあるが、飛鳥奈良時代の土師器甕 23 や須恵器壺 19 のように時期が大きく離れるものも出土している。

2. 参考遺物

第 7 図に示したものは、地元から寄贈された遺物である。今回の調査の前年に当該地周辺で行った確

認調査の際に、地元居住者の家に保管されていたものを寄贈いただいたものである。

1 は須恵器の長頸壺である。頸部以上を欠損しているが、体部は完存する。ただし、高台は後後に削り取られたような痕跡を残し、その大半を消失している。比較的肩の張った体部形態を呈し、III 型式 3 段階あたりの 7 世紀後半のものと考えられる。体部には「昭和四十年秋 上地町字奥野浦 一、二〇五番地 ヨリ発掘ス 野口彦一 六十二才」と墨書きされており、栗野北遺跡の北方に所在する奥の浦遺跡の埋蔵物であったものであろう。

2 は完形の山茶碗である。高く均整な高台を貼り付け、口縁部には灰釉が漬け掛けされる。口縁部の四方の位置に簡単な輪花が施されるが、内 1ヶ所は痕跡程度も見い出せない。したがって、四方の位置の 3ヶ所に輪花を配置した特異な形状を呈している。前述した形状から I 段階から II 段階への過渡期のものと思われ、12 世紀初頭前後の平安時代末期のものであろう。体部には前述の 1 と同じ墨書きがあり、1 と同じ場所から出土したことが記されている。

(森川)

番号	実測 値	通明	目 種	目 種 口縁 底面 その他	第 1 図 図	調査目的の物語	色 調	地 上	残存度	参考
1	2.4	S01	土師器 壺	9.2	1.6	—	内表面調整	淡黄褐 010/8	微細粒含	口縁部 1/23.1 下
2	2.5	S01	土師器 壺	—	—	—	—	灰白 02.0/8	1.5mm の砂粒含	小片
3	2.8	S01	土師器 壺	—	—	—	—	淡黄褐 010/8	2mm 以下の砂粒含	小片
4	1.7	S01	土師器 壺	—	—	ナゲ	—	淡黄褐 010/8	1.5mm 以下の砂粒含	小片
5	2.2	S01	山茶碗	—	—	—	ロクロナゲ	灰白 02.0/2	0mm 以下の砂粒含	小片
6	1.10	S01	青磁 瓶	—	—	—	—	河原 008/1	無	小片
7	2.4	S01	土師器 壺	4.8	1.1	—	内表面調整	灰白・黒 3.0/2/4	1.5mm の砂粒含	口縁部 1/2
8	2.7	S01	土師器 壺	—	—	—	—	灰白・黒 010/8	1.5mm の砂粒含	小片
9	1.8	S01	土師器 壺	—	—	—	—	淡黄褐 010/8	無	外腹に斑状付着
10	1.6	S01	山茶碗	—	—	—	ロクロナゲ	灰白・黒 010/7/2	無	小片
11	1.3	S01	山茶碗	—	—	—	ロクロナゲ	河原 011/1	1.5mm 以下の砂粒含	小片
12	1.5	S01	山茶碗	—	—	—	内表面・ハケナゼ	青 02/0/1	2mm の砂粒含	底盤 1/12
13	1.1	S01	土師器 壺	15.7	2.6	—	内表面ナゲ	河原 010/8/2	微細粒含	1/12
14	1.9	S01	土師器 壺	—	—	—	—	灰白・黒 3.0/2/4	微細粒含	小片
15	2.3	S01	土師器 壺	—	—	—	—	淡黄褐 010/8/3	微細粒含	小片
16	1.4	S01	山茶碗	—	—	—	ロクロナゲ	河原 010/7/2	無	小片
17	2.1	S01	山茶碗	—	—	—	内面・泡タタキ、内面工具ナゲ	河原 010/8/1	微細粒含	小片
18	2.9	S01	山茶碗	—	—	—	ロクロナゲ	河原 02.0/1	微細粒含	外腹に自然剥離
19	3.2	S01	須恵器 壺	11.2	—	—	ロクロナゲ	河原 010/8/1	0mm 以下の砂粒含	口縁部 1/12
20	4.1	S01	土師器 壺	22.8	13.9	—	底部下内側・ハラタツリ、外面上半ナゲ	灰白・黒 010/7/2	1.5mm の砂粒含	口縁部 4/12
21	3.7	P1	土師器 壺	—	—	—	内表面調整	灰白・黒 010/5/4	微細粒含	小片
22	3.4	P1	土師器 壺	—	—	—	—	河原 010/8/1	微細粒含	小片
23	1.2	S01	土師器 壺	—	—	—	内面糊・工具ナゲ	淡黄褐 010/8/4	2.5mm の砂粒含	小片
24	3.1	P1	山茶碗	—	—	—	ロクロナゲ	河原 02.0/2/1	1mm の砂粒含	小片
25	3.6	P1	施釉陶器 瓦	—	—	—	体表面下部ロクロケズリ	淡黄褐 02.0/2/2	1mm 以下の砂粒含	鉢底
26	3.5	P1	山茶碗	—	—	—	ロクロナゲ	河原 01/1	無	口縁部 1/12
27	3.3	P1	施釉陶器 瓦	—	—	—	ロクロナゲ	河原 2.5/1/2	無	鉢底

第 1 表 遺物観察表

【註】

- ① 伊藤裕像「中世南伊勢系土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』三重歴史文化研究会 1990
- ② 新田洋「三重県における古代末～中世にかけての土器様相」『マージナルNo.9』愛知考古学談話会 1988.10
- ③ 藤澤良祐「瀬戸古窯址群I」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要I』瀬戸市民俗資料館 1982
- ④ 前掲②と同じ
- ⑤ 前掲①と同じ
- ⑥ 前掲③と同じ
- ⑦ 中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年11月25日
- ⑧ 前掲③と同じ

V. 結語

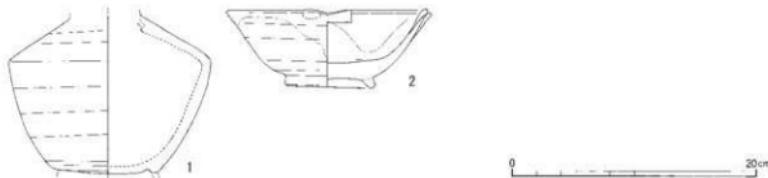
今回の調査面積は狭小な60m²で、加えて栗野北遺跡の北西隅にあたるため、遺跡の状況を明確にするには遠く及ばないものであった。井戸や溝等を検出しているが、既述したようにまとまった遺物の出土がなく、時期決定の根拠に乏しい。そのなかで、SE 4・SK 6・SD 8は鎌倉時代後半から末期として良いものと思われる。SD 1には室町時代下る土師器鍋が混入するが、最終埋没が室町時代下るものと考え、全て同様な時期の鎌倉時代後半から末期のものとしておきたい。SZ 7については、遺物に時期幅があり、包含層的なものと考えておく。栗野北遺跡に隣接して汁谷川東遺跡、栗野遺跡、栗野南遺跡、栗野東遺跡と中世の遺物が散布する遺跡が現在の栗野集落を取り囲むよう広がっている。おそらく、居住位置を微妙に変えながら中世全般にわたりて集落が維持し、現在の栗野集落に繋がるもの

と推測される。今回の調査は、その一時期の一端を垣間見たものと思われるのである。

なお、寄贈された奥の浦遺跡の遺物であるが、山茶碗は完形で、中世墓への埋納遺物の可能性がある。須恵器長頸瓶は既述したように高台を削り取られており、頸部もその際の欠損とすれば、何かに転用されたものかも知れず、本来は完形で埋蔵されていた可能性も生じる。墓壙への埋納品と想定すれば、奥の浦遺跡の近辺には小野古墳やお頭塚古墳が知られており、埋没した終末期古墳群が広がることを彷彿させるような興味深い一品である。 (森川)

【註】

- ① 関田 亜「第三章 遺跡概観」『伊勢市史 第六卷 考古編』伊勢市 平成二十三年三月三十一日



第7図 参考遺物実測図 (1 : 4)

番号	実測 番号	遺跡	出 現 場 所	直 径 (cm) 口径 底面 その他			調整目次 の特徴	色 調	地 上	残存度	備 考
				口徑	底面	その他					
1	1-2	—	栗野遺跡	—	—	—	ロクロナガ	褐色337/3	3mm以下の小石質	体面良好	
2	1-3	—	山茶碗	16.4	6.4	高台付 底	ロクロナガ	褐色12.397/1	暗赤	口辺部 底面に 凹痕	

第2表 参考遺物観察表

写真図版 1



調査前風景（北西から）



調査前風景（南東から）

写真図版 2



調査区西部全景（北西から）



調査区中央部全景（北西から）



調査区東部全景（北西から）



S E 4 検出状況（北から）

写真図版 3



S E 4 (南から)

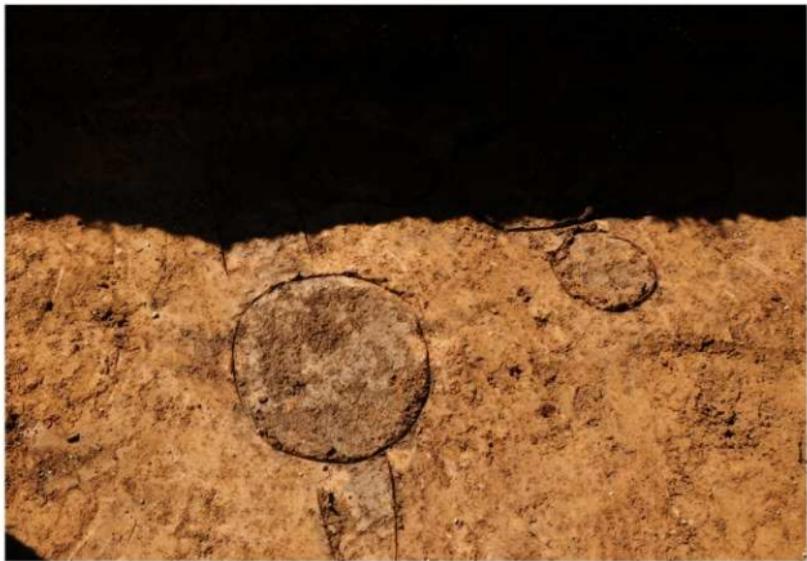


S D 1 (北から)

写真図版 4



SZ7・SD8 (南から)



P1等検出状況 (北から)



13



17



25



12



20

写真図版 6



1



2

奥の浦遺跡出土遺物

報告書抄録

三重県埋蔵文化財調査報告 406

栗野北遺跡発掘調査報告

2022(令和4)年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 共立印刷株式会社
